
魔の書

琶苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔の書

【Nコード】

N8531S

【作者名】

琶苑

【あらすじ】

森で倒れていた青年、ゼノ。

そんな彼を偶然、見つけてしまったクロウ、エンジュ、レオ。

ゼノは“呪”により、自分の影が悪魔と一体化してしまった。

理不尽にもゼノの呪を解くため、無理矢理協力させられてしまった3人。

果たしてゼノは呪を解くことができるのか？

あらすじ

悪魔や神が存在する世界、『セレティア』。

悪魔は魔界に、神は天上界に、人間は下界に、それぞれいた。

しかし、1人の人間が『魔の書』を読んだことにより、魔界の扉が開き、悪魔が下界に降り立ってしまった。

人々はそれから悪魔により苦痛と哀しみの日々を過ごすこととなった。

セレティアには3つの国が治めていた。

1つは魔術を駆使する魔法の国『レダ』。

1つは神を進行し、癒しを与える力…神術を駆使する聖なる国『シルフィーネ』。

1つは科学を駆使する国『クーロン』。

3つの国は遥か昔から敵対関係にあったのだった。

第1書：魔女の呪（前書き）

本編スタートです！

第1書：魔女の呪

「ちょっとクロウ、待ちなさいよ」

クロウと呼ばれた長い金髪を一つに結った朱眼の青年は、赤いツインテールで緑目の少女に呼び止められた。

先を歩いていたクロウは、足を止めて少女の方を向いた。

「何だ？」

「人が倒れてるのよ」

「人？こんな森の中にか？」

クロウが言うとおり、ここは深い森の中。普通、生身の人が通る道なわけがなかった。

「本当に倒れてるんだもの」

「エンジュ、どこに倒れてるんだ？」

「……あんたの下よ」

エンジュと呼ばれた少女にそう言われ、青目で緑色のボサボサ長髪の青年、レオはしゃがんで自分の下を目を細めて見た。

「コンタクトはどうしたのよ！」

「どこかで落としたみたいだな」

「落としたって……。眼鏡をかけなさいよ！もしくは代えのコンタクトはないの？」

「眼鏡ならあるけどでかいんだよなあ」

「とりあえず今はそれしてなさいよ！」

「てめえら！うつせーよ！」

倒れていた黒髪の少年はあまりの騒がしさに勢いよく起き上がった。

「お前はいつまでも俺様に乗ってんじゃねーっ！
そっちの金髪も黙って見てないで止めるよ！」

「……元気そうだな。サッサとこの森を出るぞ」

「そうね」

「早く町に行って新しいコンタクト、買わないとな」

「レオ、そっちは逆よ」

少年を無視してその場を去ろうとする3人に少年は怒りが頂点に達した。

「デメエら！このゼノ様を怒らせたらどうなるか分かっててやってんのか？」

「レオ、とりあえず予備のコンタクトよ」

「ありがとう」

「……」

誰一人、ゼノの話を聞いてはいなかったことにゼノはついに武器である大鎌を取り出した。

「ぶっ殺す！」

そして、3人に目掛けて大鎌を振り回して来た。

3人はそれぞれゼノの攻撃を避けた。

エンジユは鞭を取り出し、レオは槍を取り出した。

「俺様とやろうつてか？いい度胸だな。

俺様が何者か知ってんだろーな！」

「ゼノ”つてさつき自分で名乗ってただろ”

レオの的確な突っ込みにゼノは顔が赤くなつたと同時に怒りのボルテージが更に上がった。

「うるせえ！もう頭にきたぜ！てめえらを殺した後、身ぐるみをはいでやる！」

「追い剥ぎみたいね」

「俺の物は俺の物。テメエの物も俺の物だ」

「ガキ大将かよ」

「世の中、俺がルールなんだよ。だから、大人しく金よこせ」

「さつきと言ってることが違ってるわ……」

「うつせー！いいから、金を渡すのか渡さないのか決めやがれ」

エンジュとレオは唇を釣り上げると戦う姿勢になった。
それだけで答えが分かったゼノも戦う姿勢になった。

「お金は大事な旅資金。渡すわけにはいかないな」

「そゆこと」

「この俺様相手にいい度胸だな」

「先手必勝！」

「ファイアーボール」

エンジュが呪文を唱えると炎の玉がゼクオン目掛けて飛んでいった。

しかし、ゼノは慌てる様子もなく、大鎌でエンジュの魔術をはじいた。

「こんなもんか？」

「まさか、その大鎌が魔力のこもった魔具だったとわね……。
下級魔術じゃ簡単に弾かれるわ」

エンジュは下級魔術では効かないことを知ると、今度は先ほどよりも強い魔術を使うため、詠唱を始めた。

「させるかよ！」

「詠唱の邪魔はさせない！」

ガキンッ

と金属音が響き合う音が森中に響いた瞬間、ゼノの大鎌が吹っ飛んだ。

二人の間には今まで影で様子を見ていたクロウだった。

クロウは右手でレオの槍を受け止め、左手に持っていた大剣でゼノの大鎌を吹き飛ばしのだった。

「（こいつ、俺様の大鎌を吹っ飛ばしやがった……！）」

ゼノは自分の大鎌を吹き飛ばされたことに驚きと同時に怒りもこみ上げてきた。

エンジュも詠唱をやめ、クロウに注目していた。

「いきなり何するんだ？」

「暴れるのは勝手だが場所を選べ。
ここで暴れると森の生物に迷惑だ。
それとエンジュ」

「な、何？」

「森で炎の魔術はやめろ。
燃え広がる」

「確かに……」

「チツ！興が冷めちまったぜ」

ゼノは邪魔をされたことが気に食わなかったのかやる気をなくし、落ちていた大鎌を拾った。

「たくよ、最悪な気分だぜ」

『こういう時は気分転換に楽しいことをしたらいいッス！』

「そうだな。こういう時は酒場で酒飲んで金を巻き上げて女たちに
『キヤーキヤー』言われてえな……って、誰だ？」

聞き慣れない声にゼノはクロウたちの方を向いた。
しかし、3人共、首を横に振った。

『ここッス！』

声は明らかにゼノの下から聞こえてきた。
ゼノが下を見ると、なんとゼノの影には目や口があり、全く姿形が

違う生きていた。

ゼノは驚くより怒りが込み上がり、影に向かって大鎌を突き刺した。

『ウギヤーツ！やめて欲しいッス！』

影はゼノの大鎌が当たらないように避けた。

この様子にクロウたちは呆然とした様子だった。

「テメエは何なんだ？」

『オイラはシャドウで、“ブレイルド・ザ・シャドウ”っていうもんッス』

「うつせーよ。テメエなんて“ジミー”で十分だ。どこから来たんだよ？」

『名前を聞いたってひどいッス！
オイラは魔界から来たッス』

「魔界い！？テメエ、悪魔なのか！」

『はいッス！でも、オイラは友好的な悪魔ッスから人間に危害は加えないッス』

「んなこたあどーでもいいんだよ！いいから俺の影から出て行きやがれ」

「それは無理だ。お前らは離れられない」

クロウが2人の会話に割って入った。

ゼノはクロウの言葉に衝撃を受けていた。

「どういうことだよ？」

「これは“呪”だからだ」

呪…… ようは呪いである。

「どんな呪なの？」

「詳しくはかけた本人にしか分からないが呪であることは確かだ」

「詳しくはわかんねーのかよ！？使えねー奴だな」

「呪にかんしては、専門外だからな」

クロウはゼノから罵声を受けてもたいして気にも止めていなかった。

「なら、呪の解き方はないのかよ？」

「二つあるが、一つは呪を解くことができる奴を捜すことだ」

「もう一つは？」

「呪をかけた奴に解いて貰うことだな」

「呪をかけた相手って誰よ？」

エンジュにそう言われ、ゼノは過去の記憶を探ってみる。

「そもそも何で倒れてたんだよ？」

レオにもそう言われ、倒れる前の記憶を探ってみた。
そして、一人の人物が頭に映し出された。

「女だ」

「女？」

「たまたまここで女に会ったんだ。持ち合わせの金も無かったし、その女からぶんどろうとしたんだよ」

「追い剥ぎか！」とエンジュとレオは思ったが、口には出さないでおいた。

2人がそう思っている間もゼノは話しを進めた。

「そしたらあの女！金を渡さないどころか変な魔法を俺に使いやがった！」

「そりゃあそうだ」というようにエンジュとレオは頷いた。

「んで、気がついたらお前らに会った」

「どうやら、その女がアンタに呪をかけたみたいね。
どんな女なの？」

「どんな女って言われてもなあ…。
いきなり聞かれても…あ！」

エンジュに尋ねられ、考えこんだゼノだったがすぐに“女”について思い出したようだ。

「紫髪で黒いトンがり帽子を被ってて、箒を持ってたな」

ゼノから女の特徴を聞いて、女の正体が分かった。
箒を持ち、魔法を使う女といえば……。

「魔女だ」

「魔女ね」

「魔女だな」

3人は同時に言った。

見た瞬間、魔女だと普通は気付くだろう。

「あの女！ぜってえ許せねえ！」

ゼノは大鎌で近くにあった木を切り倒し、暴れはじめた。

『お、落ち着くッスよ！』

「次に会ったらぶっ殺す！」

クロウたちは呆れたのか、無言のまま立ち去ろうとした。

しかし、ゼノに行く道を先回りされ、去ろうにも去れなかった。

「まだ何か用か？」

「魔女捜しを手伝いやがれ」

「何で？」

「俺様が手伝えってんだから手伝うのは当たり前だ」

「なんて自分勝手な男だ。」

クロウは呆れた顔をして、エンジュとレオはため息をついた。

「こんな奴でも人に変わりはないし……」

「ここで見捨てたら、人を見殺しにしたものだしな」

「仕方ないわね。不本意だけど、手伝うわよ。」

あたしたち、用事があつて聖教会に行く所だったし」

聖教会とは、シルフィーネ国の中心にある教会で、他の国でいう城のような所である。

聖教会にはシルフィーネを統治する導師がいる。

「お前ら、聖教会に何しに行くんだよ？」

「聖教会が護衛を欲しがってるのよ」

「護衛？んなもん、兵士を使えばいいだろ」

「戦争で忙しいらしい」

自分から尋ねておいて、ゼノは興味がなさそうだった。

「で、なんだって護衛を募集してんだ？」

「悪魔の“呪”を解くシスターや神官を他の町に派遣するための護衛だ」

今まであまり言葉を発しなかったクロウが横から会話に割り込んで言った。

「呪を解くだと？聖教会に行けば呪が解けんのか！そうと分かったなら早く聖教会に行くぞ！」

『待つっスよ〜！』

ゼノは聖教会で呪が解けると分かるとズンズンと森の奥に進んで行った。

そんなゼノを見て、3人はため息を深くついた。

「うるさい人ね」

「賑やかだな」

「面倒なのを拾った」

3人は面倒そうにゼノの跡を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8531s/>

魔の書

2011年10月4日14時55分発行